

新生児病棟（NICU・GCU）での感染予防対策について

ご出産おめでとうございます。本日よりお子様を新生児病棟でお預かりしますが、その間の感染予防対策、メチシリン耐性ぶどう球菌（MRSA）をはじめとする多剤耐性菌についてご説明します。

母親のお腹の中は無菌状態のため、子宮内や産道での感染がなければ生まれた瞬間の新生児は無菌状態です。その後、皮膚や口の中、腸の中に常在菌が増えて正常細菌叢が形成され、感染防御の働きを担うようになります。

何らかの理由で入院が必要になったお子様も基本的に同じ経過をたどることが期待されるのですが、病院という特殊な環境、命を救うために様々な医療行為が必要なこと、抵抗力が弱いことなどから、お子様にとって望ましい細菌だけでなく、病気を起こすことのある可能性を持つ菌や複数の抗菌薬の効果が乏しい多剤耐性菌を持つことも少なくありません。

新生児病棟は一般の病棟に比較すると清潔度は高くなっていますが、無菌室ではありません。外部からの病原性の高い微生物の侵入を防ぐために、入室者の制限、手洗いやアルコールによる手指衛生、医療スタッフ側としてはお子様に触れる前の手指衛生や手袋の着用などを実施しています。またお子様の未熟性の程度や栄養法によってはビフィズス菌の投与などを行っています。

これらの感染予防対策の結果、MRSA等の多剤耐性菌を保菌する児・感染症を起こす児は減少しましたが、それでもこれらの病原体が新生児病棟における感染症の原因の一つであることは全国的に変わりません。また近年は、病院のみならず市中にもMRSAが存在することが知られています。

このMRSAは抵抗力の弱い児では時に重篤な病気を発症することがありますが、保菌が分かった時点で有効な抗菌薬も分かりますので対策をとることができます。新生児病棟を退院する頃には、お子様に抵抗力がついてきますので、MRSAを保菌していてもまず危険はありません。MRSAは長く入院しているお子様が保菌しやすいのですが、一般の保育園に通っている元気なお子様を調べても数%は保菌していることが知られており、稀な菌ではなく、退院後もご家庭で特に注意することはありません。ただ入院中は他のお子様への伝播を防ぐために医療者は追加の感染対策（ガウン着用等）をとらせていただきます。

ご家族様にも当病棟での感染予防対策をご理解いただき、入室時の手指消毒などをお願いいたします。また、風邪気味の方は入室をご遠慮下さい。小さなお子様には重篤な症状を呈することがあります。その他、体調がすぐれず面会してよいか悩まれる場合は遠慮なくご相談下さい。お子様の命を守るために、スタッフ一同できるだけの努力をしております。ご不明の点がありましたら遠慮なくお尋ね下さい。

2024年4月

日本赤十字社医療センター新生児科部長 中尾厚